

## 大阪長屋の歴史と再生ムーブメントをめぐって

--もうひとつの都市再生への視点--

弘本由香里

### はじめに

近世から近代へ、大阪のまちを構成し、その活力を支える基盤として圧倒的な存在感を発揮してきた大阪の長屋。優れた都市住宅として、他に類を見ないほど多様な発展を見せ、開発の波に洗われながら、現在もなお大阪の典型的な住まいとしてまちのあちこちに生き続けている。

今、大阪市内の各所で長屋再生が注目を集めているが、それは、過去形で振り返る歴史的価値の再生ではなく、過去から現在を経て未来へと続くリアルな都市と住まいの物語としての意味を孕んでいるはずだ。大阪の長屋再生を通して、現代の都市問題・住宅問題にアプローチし、それを解く鍵を見つけることができないか。そこに住み・暮らす主体の側から、都市づくりのシステムを組みなおしていく、都市再生の核心を、長屋再生ムーブメントに読み取ることができるのではないだろうか。それが、本稿の出発点である。

まず、長屋をめぐる考察の導入として、大阪の長屋における歴史の連続性と多様性に焦点を当て、その特性を大まかに概観したうえで、大阪市内都心部にあって奇しくも戦災を免れ、今なお長屋で構成された街区の姿をふんだんに残す、空堀商店街界限（中央区）及び中崎町界限（北区）での長屋再生の動きにスポットを当て、その意味を読み解いてみたい。

### 大阪長屋における歴史の連続性と多様性

#### 1) 長屋再生が意味するもの

歴史的建造物の再生や、その活用を核にしたまちづくり自体は、地域におけるアイデンティティ再構築のムーブメントとして、全国各地で数々の個性的な取り組みが見られ、決して珍しいことではない。けれど、大阪における長屋再生は、単純な歴史的価値の再生と活用という枠には、とうてい納まりきらない複雑な問いを提起しているように感じられてならない。なぜだろうか。背景に、大阪の長屋が、近世から近代そして現代もなお、大阪の典型的な住まいとして存在し、各時代を通して、圧倒的多数が長屋暮らしを直接間接に体験してきたという意味の広がりがあるからである。つまり、大阪の長屋は、大阪における住宅としての普遍性と現実性ゆえに、途絶えてしまった過去の物語の再生としてではなく、過去から現在を経て未来へと続く連続性のある物語として捉えられるべきものであり、現代の住宅問題・都市問題に直結する課題として立ち現れる宿命を生きていると考えられ

るのである。

その宿命は、重く複雑なものである。しかし、その重さと複雑さの中に、「もうひとつの都市再生」の可能性が眠っていると見ることはできないだろうか。現在、「都市再生」が政策課題として打ち出されているものの、何を再生するのか、その内実是不確かである。ミニバブル的都市開発に終わりかねないと危惧する声も多い。高度成長期に見られたような、開発圧力はもはや存在し得ない成熟社会において、本来求められているのは有形・無形の社会ストックの持続的な活用である。都市再生も、その文脈の中で解釈し直されなければ意味がない。何よりも、ストックの本質的な価値を読み取る力量が求められる。様々に変化しながら、問題を含みながらも、実態あるものとして、時代を越えて生きてきた大阪の長屋とその再生の試行は、そんな問いをなげかけてくれているのではないだろうか。

## 2) 近世から近代へ長屋が物語る民の力

幕末の大坂のまちを鳥瞰した風景画、五雲亭貞秀筆「大坂名所一覽」を見ると、画面一面に碁盤目状の市街地が広がり、町家の瓦屋根が碁盤の目を埋めるように規則正しく並んでいる様に圧倒される。商いの町・大坂では、商人らしい合理的な考え方が住まいやまちづくりにも現れている。商人にとっては、持ち家よりも借家の方が商いの理にかなっており、元禄時代でも八割以上が借家であったといわれる。しかもその借家の大半は長屋である。長屋は町家の一形態で、複数の住戸が連続して一棟の形態を持ち、一般に貸家として供給された。一面にまちを埋めつくしている町家のほとんどが長屋であったわけである。表通りに面して、端正な表情を持つ、長屋建ての町家としての借家がずらりと並び、路地を入ると小さな裏長屋が軒を連ねる。そういうまちの構造が、近世大阪の活力を支えていたのである。近世大坂の町人たちによって形成された質量ともに豊かな長屋の歴史的系譜が、近代以降の大阪の長屋の豊かな発展につながっており、一般的に長屋に対して抱かれがちな画一的な貧しいイメージとは一線を画し、大阪における長屋の驚くべき多様性のバックボーンになっている。

近世から近代へ、日本社会が大きな構造転換を迎えた時、武家の町であった東京（江戸）では面積の7割近くが武家地であったといわれる。方や、大阪（大坂）は、紛れもない町人のまちであり、何と面積の80%以上が町人地であったという。この違いは何を物語っているか。東京では武家地を基盤に、官の力で近代的都市づくりが進められていったのに対して、大阪では町人地を基盤に、民の力で近代的都市づくりに向き合っていたであろうことは想像に難くない。しかも、その町人地の大半は、長屋であったという事実がある。思えばその歴史的事実が、ポスト近代社会を模索する現代に、再び民からの都市づくりへ

の入り口として、存在を主張し始めているのではないだろうか。

官の側・支配の側から文脈ではなく、民の側・そこに住み・暮らす主体の側から、都市づくりのシステムを組みなおしていく物語として、都市再生を読み直していく必要性が見えてくる。

### 3) 生活者と住まい・まちのリアルな応答関係

もう一度、大阪の長屋の原点、近世大坂の長屋の特性に立ち返って、その本質的な価値について考えてみよう。

まず、通りを挟んで向き合う町家・長屋によって構成された町では、町ごとに「町定(ちょうさだめ)」に基づいて、高度な自治的管理が行われていた。防犯・防災・防火をはじめ、清掃・し尿処理・道路や橋の管理・町並み規制・職業規制等々まで、町組織が個々にルールを持ち、主体的に町を管理していたのである。

また、住戸内の通り庭や店の間、軒下空間、路地空間など、住まいとまちの接点が、極めてファジーに設定され、閉じることもできれば、開くこともできるという特徴を持っていた。プライベートとパブリックが浸透しあう構造を持つことが、都市コミュニティにおける安心・安全やモラルの形成にも役だっていたのではないかと思われる。

畳や建具を付けずに住戸を貸す「裸貸(はだかがし)」のシステムは、賃貸住宅であっても、居住者が自分の好みや目的に応じた住空間を主体的にコーディネートできる。いわば住み手と空間の豊かな応答関係を担保している仕組みであり、それを支える建具等の流通や職人の技の発達にもつながっていた。

そして、何よりも、過密な都市において、多くの人々が集まって住み・商いを営むための器としての、町家・長屋の機能の洗練には目をみはるものがある。制約の多い空間条件の中で、住戸内に風や光を迎え入れ、年中行事の舞台にもなり、多義的な暮らしの営みを支える空間が連続しながら自律的なまちを構成する、都市の基本構造を持っている。

こうした近世の長屋ストックは、近代化の過程で道路拡幅等の影響を受けて変容を迫られ、また戦災や戦後の開発によって姿を消していった。けれども、その価値自体は消え去ることなく、近代長屋に姿を変えながら確かに継承されている。明治・大正の大阪市の市域拡張と人口増にともなう、戦前の住宅地開発の中で、近世大坂の長屋の建築システムと建築技術が母体に、新たな法制度がいわば産婆役となって、優れた都市住宅としての近代長屋を大量に生み出していったのである。

### 4) 近代長屋の豊かなデザイン・バリエーション

大阪における近代長屋の特性を、大阪における長屋研究の第一人者である、寺内信氏の資料<sup>(1)</sup>・和田康由氏の資料<sup>(2)</sup>及び多くの助言を参考にしながら概観しておきたい。

明治期の長屋は、概ね近世の町家のプランや意匠を継承しているものが多いのが特徴である。典型的なのが、道路に直接接し、通り庭・店の間を持つタイプである。軒廻りは「塗り込め」の仕上げが多く、近世町家の「つし二階」と同じで軒高は低く、通りに面した一階のデザインも出格子で近世以来の表情を伝えている。空堀や九条や野田などに見られる、通称「トンネル長屋」(路地の入り口の門を潜ると裏長屋が並んでいるタイプ)も、明治42年の法規制以前に造られたものと考えられる。

また、明治末期から大正期にかけて、大阪府建築取締規則や市街地建築法の影響が随所に現れてくる。棟間を三尺空け、裏にも通路をとることで、便所の汲み取り用に通り庭を使う必要性がなくなり、通り庭がなくなる代わりに、玄関と台所が前面を占める「台所型」が現れ始める。軒廻りの防火仕上げをしない「出桁(でげた)」や、二階外壁に「長押(ながし)」を回したものの、壁面も銅やタイル、板や杉皮を張り巡らしたものなど、意趣を凝らした仕上げのデザイン・バリエーションが広がっていくのもこの時期である。

昭和に入ると、「台所型」をベースにした新バージョンが登場する。邸宅風に塀を構える「塀型」や、オープンスペースとしての庭を設ける「前庭型」である。もとになっている「台所型」は、大阪の近代長屋に圧倒的に多く見られるタイプである。これに区画整理地区における洋風デザインの試みが重なって、一段とバラエティに富んだ大阪独特の長屋のスタイルが生み出されていくことになる。

近代的な技術が和風の長屋にも多くの影響を与え始める。例えばそれまで日本なかった「大壁構造」の長屋が登場する。銅を張り巡らした「箱軒(はこのき)」に壁面タイル張りの「大壁構造」の長屋はその典型である。タイルの種類や色もさまざまに、工夫が凝らされている。一階の腰壁にタイルを張ったものや、御影石を使ったものなど、重厚感のあるデザインが多く見られるようになる。

ガラスの普及も昭和に入ってからの特徴である。昭和10年代には板ガラス製造技術の進歩で一気に普及し、障子に代えて自然光をふんだんに採り入れられる素材として、好んで使われるようになる。二階に大きなガラス窓を設けて、その内側に廊下をとる「前廊下型」は、今でも大阪市内随所で多数見られ、その人気の高さがうかがえる。

また、明治末期から大正期になると、耕地整理や土地区画整理事業と一体で、中産階級・サラリーマン向けの長屋供給が始まる。この時期から、住宅デザインの近代化が始まり、玄関脇に洋風の応接間の付いた、和洋折衷のデザインが登場してくる。郊外住宅地・住之江の土地区画整理組合事業地区に造られた、バルコニーや出窓など一つ一つのエレメント

に本格的な洋風デザインを施した近代長屋にいたっては、既存の長屋概念を大きく凌駕する世界を形づくっているといっている。



トンネル状の路地の奥に長屋が並ぶ(中央区)



洋風の意匠が取り入れられた長屋(住之江区)



箱軒に銅版を張り巡らした長屋(福島区)



塀を巡らした和風の長屋(阿倍野区)

## 5) 長屋に秘められた持続可能性の鍵

以上、ざっと概観してきた大阪の近代長屋群は、いまだにまちのあちこちに点在し、地域によっては部分的に更新されつつも一定の集積として生き続けている。当初の家主の手を離れ、個人所有になっているものも多く、建物の面差しも70年以上の時を経て、当然のことながら変化している。長屋の間に、建売住宅やマンションが立ち並ぶ。一見すると、新しい建売住宅やマンションに押しつぶされそうな長屋であるが、果たしてそうか。

現代の建売住宅が、たかだか25年程度で消費され、マンションでさえも30~40年で建て替えることが不思議ではないように思われている、ある種常軌を逸した社会。人生の半分にも満たない時間しか、住まいが存続し得ないのであれば、世代を超える価値の継承など無理な話ではないか。

ではなぜ、長屋は70年以上生きてきたのか。長屋の長寿の秘訣に、私たちが学ぶべきも

のは多いはずである。そこには、持続可能な社会を形成していくための、住まいのあり方、さらには住まいを通して人とまちがどう関わっていくか、何を価値として継承していくか。そこに生きる人の側から公共性を再構築いく、都市再生の核心が隠されているように感じられる。

自ら、近代の大阪の長屋に居住し、長屋の変容過程等を研究する中谷礼仁氏は『「ビルやマンションの造りを強い技術とするなら、長屋はいわば弱い技術。でも、だからこそ愛と知恵を使って長くもたせることができる」つまり、精密に造られた木造の長屋は部分的な補修が随時可能で、住人が手を加えられるから今も残っているのだ。』<sup>(3)</sup>と語る。

一方で、こうした大阪の長屋の文化的連続性とまったく無縁の経済的ロジックで、高度成長期以来、現在のマンション建設ブームにいたるまで、画一的な住宅供給が、繰り返されてきたことも否定できない事実である。今や、あたりまえと思いついでしまっている、供給者主導の一方的な住宅供給が、決定的に欠いている問題への批評を、長屋再生ムーブメントに読み取っていきたい。

大阪の長屋の特性が物語る今日の意味は、そこに住み・暮らす主体が、住まいやまちとのリアルな応答関係を持つことの重要性、それを前提にした住まい・まちづくりのシステムを再構築する必要性ではないだろうか。そんな問いとともに、大阪における長屋再生のムーブメントを見つめていきたい。

## 空堀商店街界隈における長屋再生ムーブメント

### 1) 空堀商店街界隈の歴史・景観特性

大阪城を北の起点に、大阪市内の中心部を南北に貫く上町台地。台地上を上町筋、谷町筋、台地の西側直下を松屋町筋と、三つの大通りが平行して走る。大阪城天守閣から約二キロメートル南に下ったあたり、上町筋から松屋町筋まで上町台地をダイナミックに東西に貫く商店街が通称「空堀商店街」だ。

全長約八〇〇メートルに及ぶ商店街は、東は地下鉄谷町線・鶴見緑地線「谷町六丁目」駅、西は地下鉄鶴見緑地線「松屋町」駅にはさまれた好立地。そして、台地上から台地下へ向かう商店街の東西方向の大きな坂道。商店街を尾根に南北に並ぶ小さな坂や崖。起伏に富んだ地形が、豊かな表情を見せてくれる。

実はこの「空堀」とは、豊臣秀吉が大坂城を築城した際に、南面を防御するために構えた三の丸の外堀「南惣構堀(みなみそうがまえぼり)」に当たる。慶長十九年(一六一四年)大坂冬の陣の後、徳川方に埋められてしまうまでは、ここより北が大坂城内だった。江戸時代初期には、空堀は御用瓦師の瓦土取り場で、空堀商店街の両側が窪地になっているの

はその名残。江戸時代中期頃から長屋の建ち並ぶまちになっていったといわれる。

現在の商店街の原型は、明治から大正時代に遡る。縁日に立った定期市や夜店からまちに賑わいが定着していったらしい。大正時代末には、道路拡幅「軒切り」で四メートルの街路が六メートルに広がり、現在の商店街の骨格が形づくられた。

戦災を免れた空堀商店街界限では、戦前からのまち暮らしの風景が途絶えることなく生き続けてきた。商店街をはさんで南北に、路地を張りめぐらせて広がる長屋のまちが、その舞台だ。時代の波に洗われて、近世の建築物こそ姿を消しているが、表通りでは明治期の塗り込め（漆喰）の長屋や、昭和初期に流行った銅版やタイルの壁に箱軒の長屋がまだまだたくさん見られる。路地の奥に並ぶ裏長屋も、新建材に覆われてきてはいるが、大正から昭和戦前期の風情を留め、繊細な格子やガラス窓など質素ながら品のある意匠を所々に残している。

旧大阪市電の軌道の敷石を張ったという石畳も、路地のあちらこちらで存在感を放っている。坂の多いまちならでは、煉瓦敷きや石畳の階段、煉瓦積みの建物の基礎や石垣など、独特の立体的な眺めに出くわすのも魅力である。路地の暮らしの機微や風習もしっかり伝えられている。まちの要所要所には、お地蔵さんやお稲荷さんが大事に祀られている。ご飯時には家々のおかずの匂いが路地に漂う。プライベートとパブリックが共存する路地空間が、いまでもお互いを気遣い支え合うコミュニティを支えている。

## 2) 長屋再生プロジェクトの始動

平成十三年四月、有志で「空堀商店街界限長屋再生プロジェクト（からほり倶楽部）」を立ち上げた建築家の六波羅雅一さんは、十五年ほど前から空堀に仕事場と住まいを構え、まちの魅力を肌で感じてきた一人。都心にありながら、昔懐かしいまちの風景、木や土で出来た長屋の建築としての素晴らしさ。路地や石畳・石垣がつくる人間的な空間の優しさ。「知れば知るほど、その一つ一つに蓄積された知恵に驚かされ、心引かれていった」と。

その一方で、「現行の建築法規のため、道路に接していない家屋は建て替えることができない。放置されて廃墟と化していったり、解体され更地のままになることも少なくない。老朽化した長屋でも、柱や梁さえしっかりしていれば、改修して十分に住み続けることができる。大掛かりな解体工事をして駐車場をつくるくらいならば、環境のためにも建物本来の魅力を活かして、残していくことができないものかと考え始めた」。「からほり倶楽部」では、長屋の所有者と入居希望者を結ぶ長屋物件説明会の開催を手始めに、長屋再生のモデル的事業の実現まで、古いまちのよさを残しながら新しいまちの魅力を育てる取り組みを進めている。彼らのプロジェクトを始め、その他の実践例も含めて、印象的な空堀商店

街界隈のシーンのいくつかを紹介しよう。

### 3) 新旧長屋の競演・進化の現場

谷町筋と松屋町筋の間、長堀通と空堀商店街を突き抜けて走る、御祓筋（おはらいすじ）は、数々の空堀名物に出会うことができる、限界を代表するストリートの一つである。商店街から御祓筋の北側・長堀通近くには、鼻緒の生地パターンを使ったバッグで有名な「菱屋カレンプロッソ」。漆喰の外壁を引き立たせる、真っ赤な内装壁。粋な店の姿が通りに際立つ。そのはず向かいには、昔ながらの心和む風情で、思わず暖簾を潜りたくなる「丸芳食堂」。通りをはさんで、いかにも空堀らしい味わいを醸し出すまちかど。新旧の文化が出会う辻。ここは、四辻特有の隅切り型の長屋が三軒揃うビューポイントでもある。カメラやスケッチブックを手にした人の往来も多い。



「菱屋カレンプロッソ」のウインドウ（中央区）

四辻から商店街方面へ歩を進めると、路地の入り口に路地組合の方々のお名前が並ぶ「石丸会」の門が目にとまる。路地の奥には、石丸大明神・玉姫大明神を祀る見事な祠がある。さらに御祓筋を進むと、紅茶ショップ「style」。そこから少し路地を入ったところに、三軒長屋を改修した、陶芸工房&カフェ「心裸（しんら）」がある。いずれも、岡田昌之さんが、大半をセルフビルドで改修して開いたものを徐々に進化させ、その後プロの手も入れて再改修したものだ。

当初岡田さんが実証してみせたセルフビルドの挑戦は、後続の活動にも大きな影響を与えた。「長屋の改装工事全体を大工さんに頼むと、そうとうな金額になってしまう。長屋の再生を経済的に成り立たせようとする、構造や設備など安全上プロの技術が不可欠な部分は建築士や大工さんに頼み、その他の自分でできることはできるだけセルフビルドでやろうというのが有力な手法になる」と、六波羅さん（からほり倶楽部）もいう。

### 4) 長屋・屋敷再生複合ショップの誕生

空堀商店街を横切ってしばらく行くと、「からほり倶楽部」の活動のエポックとなった、長屋再生複合ショップ「惣」が見えてくる。朽ちかけた長屋を、解体して駐車場にする計画が進もうとしていた瀬戸際、「からほり倶楽部」が長屋を借り受け、店舗を誘致して活用する提案を所有者に持ちかけ、見事に成就させた。平成十四年七月オープン。まちの人に気軽に入ってきてもらいやすいようにと、二軒の長屋だった空間の中央に共用のオープン



なアプローチを設け、そこから5店が自然につながるスタイル。ペットグッズ、和雑貨、カフェ&ギャラリー、手作り雑貨、パーストーン……。商売は初めてという店主も多く、お互いに汗をかいて開店にこぎつけたセルフビルドの内装といい、夢を持ち寄って成長する共同体のシンボリック長屋再生、手作り複合ショップだ。

「惣」の成功を礎に、お屋敷再生複合ショップ「練」も平成十五年二月にオープンした。眼鏡、バッグ、着物に、チョコレート等々、こだわりの店が十店舗。庭やエントランス回りのオープンなスペースには、チャレンジショップも入れ替わり出店する。「和」と「洋」、「新」と「旧」異なる価値を相互に練り込ませていくことで、このまちの持っているよさを保ちながら、新しい文化を取り入れていきたい。「練」は「からほり倶楽部」

がまちに寄せる思いと姿勢を形にして発信したものだという。松屋町筋と長堀通の交差点から一本東入った通りの角に建つ、大正時代末期に移築された大きな母屋に蔵が付いた立派な屋敷。地下鉄鶴見緑地線「松屋町」駅から徒歩すぐ。今や老若男女がまち歩きを楽しみながら立ち寄り、地域のランドマーク的存在である。



長屋再生複合ショップ「惣」(中央区)



お屋敷再生複合ショップ「練」(中央区)

## 5) まち・人・暮らしをつなぐ仕掛け

御祓筋から谷町筋にかけて、空堀商店街の両側の路地を入ると、建築家やデザイナー、アーティストたちを始め、このまちに魅せられた人たちが、小ぶりの長屋を改修してアトリエや住まい、オフィスあるいはギャラリー等として利用する例が点々と見られる。多くはこつこつと時間をかけて、セルフビルドで好みの空間をつくっていく、そんな営みの幸福感が伝わってくる。

もちろん、空間としての長屋や路地だけでなく、暮らしを支える数々のお店の営みがあって初めてまちの暮らしが成り立つ。空堀商店街には、地域の台所として長く愛されている小売店や、まちの茶の間・縁側のような飲食店など、まち暮らしを支える資源も豊富。まち暮らしの醍醐味を味わえる。

「地域に暮らす人たちが、まちの魅力に気づき、まちに誇りを持って、まちの未来を考

えるきっかけになれば」と、「からほり倶楽部」は、平成十三年から毎秋「からほり まち アート」を開催している。空堀商店街界隈の、路地や長屋や商店等々、まちじゅうを会場にアートやクラフトや音楽、パフォーマンスなど、さまざまな表現が繰り広げられる。平成十四年度は、二日間で約一万人が来場。商店街を始め、古くからまちに暮らす人たちとの接点も少しずつ広がってきた。

## 6) 人と地域の持続的な成長モデルへ

さて、谷町筋を越えて東側に行ってみよう。五十軒筋(旧熊野街道)を北に少し行くと、空堀に居を定めてもう十七年になるという、「ちんどん通信社」の看板。ちんどん屋さんの姿やお囃子の音色は、いまではすっかりまちのお馴染みになった。東へ坂を少し下ると、空堀桃谷公園の前に「下町のフランス料理屋・からほり亭」がある。プレス工場を改装し「からほり倶楽部」が誘致した第一号の店舗。文字どおり下町のレストラン。せわしない繁華街のお店と違い、ゆったりと時間が流れ、子ども連れからお年よりまで、近所の人たちが気楽に立ち寄って食事やおしゃべりを楽しめるのがいい。

再び五十軒筋を北に進むと、やがて道沿いに黒い板塀をめぐらした端正な町家「楓ギャラリー」が現れる。オーナーの三島啓子さんは、町家・長屋が次々に姿を消していく様に心を痛め、平成六年秋、生まれ育った町家の一部を改装してアートギャラリーを開いた。「古い町家の魅力をたくさんの人に知ってもらいたくて。大資本の開発よりも、一人一人の力を引き出していくまちづくりがいい」と。「楓ギャラリー」の裏手に並ぶ長屋には、若いアーティストたちが集まる。路地裏空間は、アートのインキュベーションでもある。

上町筋方面へ足を伸ばすと、町家改修型デサービスセンター「陽だまり」が優しい表情で佇んでいる。空堀商店街で寝具店から福祉用具レンタル・介護サービス業を起こした白石喜啓さんが、新たに手がけたデサービス事業。ユニークなのは、住み慣れたまちの中でお年寄りの暮らしを支えたいという思い、地域資源の長屋を活かしていきたいという思い、両方から持続的な地域と暮らしの将来像がイメージされていることだ。「からほり倶楽部」との日ごろの付き合いがきっかけで、近所にある良質な長屋の活用を思い立った」と語る白石さん。

「陽だまり」の改修は、白石さんの思いに共鳴した設計者・松富謙一さんの感性と、長屋を熟知した地元工務店の技、そして学習をかねて参加した学生たちボランティアの力を集めて進められ、平成十五年三月にオープンした。定員十名の小さな施設は懐かしい日本の住まいそのもの、木と土の温もりが溢れる。お年寄りも、好みの場所で思い思いに時を過ごす。普通の台所で作る食事。お年寄りもスタッフも、ごく自然に家族のように食卓を

囲む。すべての部屋が中庭に面し、光と風が流れ込む。中庭のデッキに腰掛ければ土や草花に触れることもできる。「施設を利用するお年寄りの心身の状態が、日に日に安定し食欲も増してくるんです。長屋の力としかいいようがないです！」と施設長の早川靖枝さんも驚くほどの効果が生まれている。

近所の子どもたちも、「陽だまり」に遊びに立ち寄る。地域とつながる、オープンなサービス拠点の拠点は、新旧世代と文化をつなぐ場にもなり得る。空堀の長屋再生ムーブメントが、地域に根を張り、流行を越える不易の力を育みつつある。

## 中崎町界隈における長屋再生ムーブメント

### 1) 中崎町界隈の歴史・景観特性

JR・阪急・阪神・地下鉄、複数の鉄路が集まる、大阪の玄関・梅田。ターミナルを中心に喧騒の繁華街から、徒歩僅か十分ほど、JR東海道線の東側に足を踏み入れると、一転時代が変わったかのようにスローな空気漂うエリアが現れる。時のスピードを隔てる鉄道の高架は、まるで残されたまちを守る城壁のよう、高架下のトンネルは、不思議の国への入り口とでもいうべきか。暗闇を潜り抜けて道を進めば、やがて長屋が軒を連ねる町並みにたどり着く。振り返ると高架の向こう側に、ターミナルを取り巻く高層・超高層のビルシルエットが重なっている。

ここが、「中崎町」と呼ばれる一帯。中崎西、中崎、万歳町界隈である。梅田に隣接する地だけに、オフィスやマンション、倉庫や町工場も多い。けれど一番の特徴は、奇跡的に戦災を免れたまちならでは、とりわけ中崎西一丁目・四丁目、中崎三丁目界隈、半径二〇〇メートルほどのコンパクトなエリアには、戦前からの路地と長屋の懐かしい風景が濃密に残されている。高度に開発された梅田のわずか目と鼻の先だとは、にわかに信じ難いほどだ。

江戸時代に遡ると、一帯は大坂三郷の外側の村域。明治に入って梅田に大阪駅が出来て後も、中崎町界隈はしばらく田畑の残るのどかなまちだった。やがて市街化の波とともに、畦道や運河がそのまま通りや路地に姿を変え、長屋のまちが広がっていった。そんな土地の歴史が、中崎町特有の、迷路のような街路空間の下敷きになっている。

表通りの長屋には、箱軒を巡らしたものや、タイル張りの壁を持つものなど、堂々とした昭和初



長屋の一角に新しいカフェが誕生（北区）

期の様式を伝えるものが点在する。路地を入れれば、ほのぼのと鉢植えの緑が並び、小ぶりな長屋が肩を寄せ合うように並んでいる。長屋の居住者にはお年寄りが多く、ゆっくりと一日一日が過ぎていく。まちかどのお地蔵さんが、お年寄りたちの毎日を見守っている。

## 2) レトロでスローなまちが人を呼ぶ

実はこの数年、レトロでスローなこのまちへタイムスリップしてくるかのように、足を踏み入れる人が増えている。自分らしい表現の場・つながりの場を求めて、カフェやギャラリー、雑貨店やヘアサロン、オフィスや住まいなどを構える人が、後から後から集まってきているのだ。その多くが、長屋を改修して活用している。家主との交渉次第で、家賃も安く、年月を重ねて使い込まれて来た



アートギャラリー「楽の虫」のある路地（北区）

木や土の独特の温もりといい、改修の面白さといい、長屋は彼らの創造力を刺激し、思いを形にする格好の空間なのである。それぞれの夢を求めて中崎町にたどり着いた新たな住人たちは、戦前からの暮らしが凝縮された長屋のまちを舞台に、何を思いどんな営みを繰り広げているのか。

中崎町ムーブメントの草分け的存在が、アートギャラリー「楽の虫」の宮久保忠広さんだ。倉庫だった路地裏の長屋を改修して、平成九年に念願のギャラリーを開いた。昭和の暮らしがそのまま残っているようなまちの魅力と、梅田や茶屋町から歩いてすぐの地の利が、夢の実現に向けて宮久保さんの背中をぐっと押した。「繁華街のメインストリートよりも、路地裏で素晴らしい作品に出会えるギャラリーをつくりたかったから」。宮久保さんの夢にぴったりのまちとの運命的な出会いだった。四年後には、通りの四辻に面した隅切型の長屋に、二号店・ネコアートと手作り雑貨の店「RAKUNOMUSI」も開いた。出会いは新たな出会いを呼び寄せる。「楽の虫」を訪ねるアートやクラフトの作家、お客さんたちを通して、中崎町の魅力がじわりじわりとまちの外に伝わっていった。同時に、ポツリポツリ、年を追うごとに新しいお店の数が増えてきた。

宮久保さんの始めの一步は、お年寄りが暮らす静かな長屋の並び、緑溢れる路地の奥。周囲の空気を乱さない、「楽の虫」と描かれた控えめでかわいい看板がちょこんとぶら下がっている。「楽の虫」のお向かいには、服飾のアトリエ「マタタビ洋服店」。童話の世界にでも迷い込んだかのような、不思議な佇まいを楽しませてくれる。なんとも、心ときめく路地の風景がある。

### 3) 新・旧の職人文化が芽を出す

もともと中崎町界隈は、職住一体の職人のまちの表情を醸し出してきたまちである。今もあちこちに、印刷・製本、ガラスや金網の加工など、現役の町工場を数多く見つけることができる。代表的な一軒が「MAEDA CRAFT」。大小さまざまな木箱など、木製品の製造販売を手がけている。日本で唯一、「コカ・コーラ」の正式承認を持ち、コカ・コーラグッズも扱う。知る人ぞ知る一軒だ。そんなものづくりのまちの気風が、なせる技かもしれない。ここ数年増えている中崎町のニューカマーたちの多くは、自らの手で何かを創り出し生業にすることを志す、ネオ職人とでもいうべき創造者とその予備軍たちである。

例えば、通りに面した長屋の一角を改造した「cabo verde」。大阪発信のカジュアルなブランドやシャツやパンツのカスタムメイドを手がける、こだわりの店だ。同じ建物内に「gab gallery」を併設し、アクセサリーや小物など若手作家の作品を発表する場としても活用されている。

幹線道路・都島通からほんの少し入ったあたり、一棟の長屋にユニークな三つの世界がポツポツと並ぶ。一つは、ギャラリー&カフェ&バーの「巣バコ」。若い女性二人が、長く空家だった一戸を借りて、コツコツと自力で改装し、小学校の机と椅子などなど...懐かしい家具を集めてつくった、文字通り巣箱のような空間だ。

その横に、古着・リメイク・雑貨・手作りの店「かえる家」。こちらも、若い女性が二人で始めた店。「大きな会社に勤めるよりも、無理せず自分のペースで好きな服飾の仕事ができて幸せ」。店内は、広さといいデコレーションといい、まるで彼女たちの部屋そのもの。「ちょっと友達の家遊びに行くという感じで、お客さんが気軽に何度もぞいてくれます」。「若い子好みの古着には、もとはお年寄り向けのワンピースやブラウスだったものもあるから、意外と近所のおばあちゃんが喜んでくれて、うれしいです」と、くったくのない笑顔が気持ちいい。「かえる家」の横、ガラス工房「ユトリト」では、女性たちがテーブルを囲み、とんぼ玉やステンドグラスなど、手技を楽しんでいる様子が見える。



古着や雑貨屋に姿を変える長屋（北区）

### 4) 成熟社会の申し子たちが求めるもの

ユニークなカフェと雑貨店などが、わずか百メートルほどの間に点々と並ぶ細い通りも

ある。カフェ「パラボラ」や「うたたねカフェ」はふと立ち寄って休憩したくなるなごみ空間。地元で生まれ育った姉妹が営む手作り工房「リンドグレーン」。アクセサリー&アンティーク「gale(ガレ)」、古道具「ひょうたん屋」、カフェ&ギャラリー「PEACE MOTHER」、おもちゃ&カフェ「TOY ' s CAFÉ N・TYLE」などなど。もちろん、面白いのはここだけではない。うっかりすると見過ごしてしまうほど、昔ながらのまち並みに見事にまぎれ込んでいる店を、宝探しの気分で探し歩いてみるのも楽しい。

大阪市立大学と近畿大学の学生三人が卒業論文・プロジェクトとして実現した、「R café」も面白い。路地裏の小さな長屋を借りる交渉からスタートし、資金調達、改修計画・設計、そして自力の工事と、長屋再生の一連のプロセスを乗り越え、メンバーの一人・藤井有美さんは、カフェの経営を自らの生業として選択した。WEBサイトで表明された、プロジェクトへの思いが印象的だ。「社会の限界、経済の限界、平和の限界、そして地球の限界。あらゆる限界を知りながら生活をしている最初の世代が私たちなのだと思います。私たちはそういった最初の世代として何を残し、何を創っていかなければならないのか。それを考えることは一つの使命のように感じます」。その思いが、長屋の再生利用という形に結実している。朝食サービスには、地元の人たちが、午後にはまちの外からやってくる人たちが、思い思いの時を過ごす場としてまちに根を張りつつある。

## 5) 自己実現の装置としての長屋

こうした若い人たちの動きとまちの変化を、この数年じっと見つめてきた人もいる。仕事を半ばリタイアし、第二の人生の舞台にこのまちを選び、自ら長屋を改造して、設計事務所と囲炉裏のあるカフェ&ギャラリー「創徳庵」を構えた、久保昌徳さんである。「戦後働きずめに働いてきた世代は、ほっと息をつきたくなっている。若い人たちの中にも、前世代の記憶の遺伝子が宿っていて、このまちに心の故郷のようなものを感じているんだと思います」。「終身雇用も保証されない時代になって、今の若い人たちは自分で自分の生き方を模索しなくてはいけない。まちの中であって家賃も安い長屋は、そんな若者の成長のプロセスを引き受ける役割を果たしているんだと思います」。

数々の若者たちの成長の物語が繰り広げられている中崎町。そのなかであって、ひととき特徴的な存在が「Salon de AmanTo(天人)」。パフォーマーのJUNさんが、長屋の改修過程そのものを、パフォーマンスとして公開し、ご近所の人やクチコミで興味を持ってやってきた人たちなど、述べる二人が関わる長屋再生を成し遂げた。誕生のプロセスの中で「天人」は、誰にも開かれた場としての性格を豊かに宿していったのだろう。集まってくる人たち自身の発案で、カフェの片隅に、ミニFM局が開設されたり、さまざまな

セッションや文化教室が開かれたり、「天人」から生まれる活動はそこに関わる人と出会いの数だけ無限に広がっていく。

もちろん、古くからの住人にとって、こうした若者たちの登場に、とまどいが無いわけではない。些細な衝突もたまにはある。けれど、それに勝るまちの包容力も目覚めつつある。中崎町で印刷業を営み、戦前からこのまちに住み続けてきた浅野穰一さんは「まちはクロス・カルチャー。多少の意見の違いは乗り越えて、お互いにいい意味で影響しあって成長していきたい。それが、まちを大切にすることにもつながる」と、このまちに引かれて集まってくる若者たちとの、前向きな交流を怠らない。まちへの自信も回復してきた「都心で、地べたに近いところで暮らせる価値がどれだけ大きいのか。そう思えば、今話題の超高層の六本木ヒルズよりも、水平の長屋の方がずっと豊かじゃないか」と。

## 6) ニューカマーとオールドカマーがつくる未来は

中崎町のマンションにオフィスを設け、語学を活かしたITと人材紹介ビジネスを手がけている船津敦子さんは「都心でありながら生活の匂いの残る中崎町は、仕事への集中や刺激と、ほっと寛げる空間の両方がある、創造的な営みにもってこいの場所」と、このまちに惚れ込んだ一人。暮らしの中で実際に活かしているまちのお店情報を中心に集め、シンプルなインデックスにまとめて、平成十二年からiモード「なかざきちょうマガジン」で発信している。多言語サイトで外国人のアクセスが多いのも特徴だ。

海外の人材との豊富なネットワークを持つ船津さんは、若い創造者たちが集まる中崎町を、ニューヨークに重ね合わせて夢を描く。「例えば、ニューヨークのアートフェアで中崎町のアーティストを紹介したり、ニューヨークのアーティストを中崎町で紹介したり、アーティストの才能を伸ばすチャンスのあるまちになるといい。中崎町は、外国人も暮らしやすい、外国に直接つながることのできるまちだと思います」。

中崎町界隈の魅力と若い創造者たちの存在を多くの人に知ってもらいたいと、平成十三年から「中崎町アートフェア」も開催されている。ギャラリーや雑貨店、カフェなどを拠点にした、良質の作品展、コンサートやセールなど、MAP片手にまちを歩きながら、さまざまな趣向を楽しめるイベントで、仕掛け人は「楽の虫」の宮久保忠広さん。

回を重ねて、新・旧住人がいっしょにアートフェアを運営する関係も芽生えてきた。フェアをきっかけに、地元の人たちがお店やギャラリーを覗き、新しい触れ合いも生まれている。自然にお店同士の行き来も広がってきた。ニューカマーたちが描く物語は、このまちをどう変えていくのか。「何を残し何を創っていくのか」問いかけが、いよいよリアリティを持ち始めている。

## おわりに

誌面の都合で紹介できなかった事例も多々あるが、駆け足で空堀商店街界隈及び中崎町界隈の印象的な長屋再生ムーブメントを追ってみた。これらのムーブメントを都市再生という視点から読み取ろうとする際に、改めて確認しておきたいのは、長屋再生というものが、決して建物としての長屋を単に再生するという意味ではないということである。そうではなく、長屋が構成するまちの構造が担保していた機能こそ、本来再生する価値があるものだということである。それこそが、都市再生の鍵と言い換えてもいいだろう。

その意味で、空堀にも中崎町にも共通して捉えられる鍵がある。まず、自分流の表現をかなえ持続的な愛着につながる仕組みとして、自らの手を何らかの形で加えていく「セルフビルド」の余地があること。そして、さまざまな価値観・階層を受けとめて活力とモラルを育む「ソーシャル・ミックス」型のまちの構造を持っていること。人々が夢を追う力・実現する力を育む「インキュベーション」の仕掛けが自然にまちの構造の中に組み込まれていること。それらの機能が、「まちとのつながり」というストーリーの中で一体的に再生されていくこと。端的に言えば、人の力が再生されるまちということである。もちろん、そうした営みを可能にしている受け皿としての、長屋の構造に学ぶべき点もふんだんにある。

大阪の長屋の特性が物語る今日的意味は、そこに住み・暮らす主体が、住まいやまちとのリアルな応答関係を持つことの重要性、それを前提にした住まい・まちづくりのシステムを再構築する必要性であろう。そこに、都市再生の核心を読み取っていきたい。

## 脚注：

- (1) 寺内信氏『大阪の長屋 近代における都市と居住』(1992年、INAX ALBUM 7)
- (2) 和田康由氏「大阪長屋サミット基調講演資料：大阪の長屋の種類と特徴」(2003年3月15日、大阪市立住まい情報センター)
- (3) 『あんじゅ』10号(2002年3月、大阪市立住まい情報センター)「住むまち・大阪STYLE」から

## 参考文献：

- 『大阪市立住まいのミュージアム図録 住まいのかたち 暮らしのならい』(2001年、大阪市立住まいのミュージアム)
- 『まちに住まう 大阪都市住宅史』(1989年・2001年、平凡社)
- 『からほり絵図』(2003年、からほり倶楽部)